

# 「意味しないもの」としての〈母〉

——アルベール・カミュと性差

内 田 樹

## 1・

1945年冬、ジャン＝ポール・サルトルはニューヨークの新しい恋人に会うためにアメリカの大学の招聘を受けて、パリをあとにした。残されたシモーヌ・ド・ボーヴォワールは鬱屈の日々を、最も近いもう一人の男友達アルベール・カミュと頻繁に出歩いて過ごした。そのいささか背德的な気分のまじった時期を彼女は率直な筆致でこう回想している。

「ある晩、私たちはリップで夕食をとり、ポン・ロワイヤルのバーで看板までねばったあと、シャンパンを一本買い、ラ・ルイジアヌで午前3時までおしゃべりしながらそれを空にした。私が女なので——ということは封建的な彼女にとって対等な人間ではなかったので——彼はときどき私に親しく内心を打ち明けることがあった。私に『手帖』<sup>カルネ</sup>の一節を読みきかせ、個人的な事柄について語り、彼に取り憑いて離れない問題を繰り返し口にした。それは『いつか真実を語らねばならない』ということだった。事実、彼の場合は、他の人たちの場合よりもずっと、実生活と作品の間に深い溝があった。二人で出かけて、夜が更けるまで飲んだり、しゃべったり、笑ったりしているときの彼は、人を笑わせてくれて、辛辣で、少しやくざっぽく、話題も相当にきわどかった。彼は自分の感情を制御できず、衝動を抑えることのできない男だった。」<sup>1)</sup>

これはその数年後、サルトルに与して「私の大好きだったカミュはもうずっと前から存在しなくなっていた」<sup>2)</sup>と告げて訣別することになるボーヴォワール

ルが、カミュについて書いた最も愛情のこもった、そしておそらく最も適確な肖像である。

この肖像のうちで私たちが興味を惹かれるのはカミュの一種の「幼児性」のまじり込んだ男性誇示である。とりわけ彼が「封建的」(féodal)な男であるがゆえに彼女を「対等者」(égale)と見なさず、そのせいで節度なく彼女に内心を吐露することがあったという一節である。

ボーヴォワールのこの観察はカミュという人の思考の資質をみごとに言い当てている。

彼女をつねに自分と対等の人として遇してきたサルトルに対比したとき、カミュの男性誇示癖は、際立った特性と映ったことだろう。「封建的」という大仰な形容詞は彼女がカミュの性差にかかわる認識の「後進性」「未開性」を批判的に受けとめていたということと、この偏見を癒しがたい固疾とみなして、説得や教化をあらかじめ断念していたことをうかがわせる。

しかし不思議なのは、この時期彼女にとって理解しがたかったのは、彼女に内心を包み隠さず語っていたはずのサルトルの不透明性であり、彼女が慰めを得ていたのは「封建的」な男性の透明性であったということである。

サルトルは人間関係で何よりも大事なものは「透明性」(transparence)だと宣明していた。

「人間関係を蝕むのは人々が他人に対して隠しごとや秘密を持つことです。(…)透明性が秘密に取って代わらなければなりません。二人の人間が互いに秘密を持たず、内面も外面もひとしくさらし合い委ね合うときに、二人の間には何の秘密もなくなることでしょ。」<sup>3)</sup>

しかし当時のボーヴォワールにとってサルトルは本人が信じているほど分かり易い人物ではなかった。

「15年間も続いている関係では、どれだけのものが習慣に属しているのだろう。どれほどの妥協をそれは含んでいるのだろう。私の答えははっきりしている。でもサルトルの答えは分からない。私は以前よりは彼のことを受け容れら

れるようになっていた。けれどもそのせいで彼はかえって不透明 (opaque) になってしまった。」<sup>4)</sup>

このささやかな三角関係のうちに私たちは後年フェミニズムの論点となる性差のアポリアを透かし見ることができる。

サルトルは性差を原則として認めない。

「私たちは二人とも女性的本質 (une nature féminine) なるものが存在するという考え方を認めません。」<sup>5)</sup>

彼にとって性差は単なる文化的な擬制にすぎない。ちょうど彼が『ユダヤ人問題についての省察』でユダヤ的本質 (juiverie) を否定し、ユダヤ人の思考・行動の特性をすべて歴史的与件のうちに解消してみせたのと同じ論法でサルトルは性差を否定する。

「女らしさ」(féminité)「男らしさ」(masculinité) なるものは、一定の歴史的條件が強要する規範にすぎない。だからサルトルは自分の中にさえ「女らしさ」があることをいさぎよく受け容れる。

「女性にはある種の感情の型式、存在の仕方があります。私は自分のうちにもそれを認めました。だからこそ私は男たちとよりは女たちとうまく話することができるように感じたのです。」<sup>6)</sup>

性的本質の否定から「男女等格」論は直接に導出される。

「私たちの関係において、私はあなた (=ボーヴォワール) をつねに自分と対等の人 (une égale) とみなしてきました。(…) 私は自分があなたより優れているとか、あなたより知的だとか活動的だとか思ったことはありません。(…) 私たちは等格者でした。(Nous étions des égaux.)」<sup>7)</sup>

サルトルはこうして一切の差別を解消し、「本質」の呪縛から解き放たれた個体たちが「等格」で「透明」なかかわりを結ぶ社会を理想として提示することになる。

この「男女等格」論に対比すると、カミュの性差認識の「封建性」は歴然としているように思われる。

しかしことはそれほど単純ではない。

第一に、カミュの性差認識の「封建性」は少なくとも一時期は、『第二の性』の著者との親密なコミュニケーションを妨げるものではなかったということ。

第二に、自分の「男らしさ」を自明の前提としていたのはサルトルの方であってカミュではなかったことである。

「女らしさ」を自分のうちに認めるサルトルはその個人史を「男性特有の滑稽さ」から解放されてゆくプロセスとして回顧している。つまり出発点においてまず過剰な「男らしさ」が彼を満たしており、彼の努力はそれをそぎ落とし、「透明」なものとなることへ向けられていたのである。サルトルにとって「男らしさ」とは減算すべき何ものかとして把持されていたわけである。

一方、女性を等格者とみなさないカミュにとって、自分が「男である」(être un homme) ことは、自明の前提でも、出発点における所与でもなかった。一人の男性が生物学的に雄であることの文化的価値は、カミュにとってはさしあたりゼロである。「男らしさ」は行動を通じて構築され、他者の承認を得てはじめて個人の属性に加算されるものだからである。

この努力を怠るものは「男ではないもの」すなわち「卑劣漢」(vilain) に類別される。

サルトルと同じくカミュも「男らしさ」なる観念が文化的な擬制であることを知っている。にもかかわらずカミュは「男らしさ」に固執する。「男らしさ」なるものがある種の地域的・民族誌的偏見にすぎないことを知っていながら、それがいかなる汎通性も持ちえないことを知っていながら、なおカミュは「男らしさ」に高い賭金を積み続ける。

この屈折した性差認識の由来とその思想的な射程を検証するのが本論考の目的である。

男性誇示とはどのような具体的な徴候を示すのか、またそれはなぜ「非等格者」である女性に対する無防備な自己露出と親和するのか、これがさしあたり私たちの扱う問いである。

「男らしさ」を誇示する男性が女性に対してときに幼児的な甘えを示すことは、経験的には通俗的な「事実」にすぎない。しかし表層に露出したこの通俗的事実はカミュのテキストの最も解読しがたい箇所の端的な徴候なのだと私たちは考えている。

ボーヴォワールとは反対に、私たちは次のような仮説から出発する。「彼の場合は、他の人たちの場合よりもずっと、実生活と作品の間に深いつながりがある。」

## 2・

アルベール・カミュの「男性」の物語の上に「父親の不在」が無縁であるとは思われない。この論件についてはすでに別稿で論じたけれど<sup>8)</sup>、ここでは違う論脈で再び検証してみたい。

葡萄酒会社の社員だったリュシアン・オーギュスト・カミュは1914年10月、次男アルベールが生後11ヶ月のときに、マルヌの戦場で頭蓋に砲弾を受けて戦死した。母カトリーヌ・カミュは夫の死の衝撃で、もとの聴覚障害に言語障害が加わり、社会性の希薄な、極端に受動的な女性となった。彼女は読み書きができず、二人の子供たちが戦災孤児としての国家保護を受ける申請書類を作成することさえできなかった。

幼児二人をかかえた彼女はアルジェの実家に戻り、そこで彼女の母と弟と暮らすことになる。このアルジェの下層労働者街ベルクール（Belcourt）で、アルベール・カミュは17歳までを過ごした。

アルベールの叔父に当たるエチエンヌ・サンテスは『啞』(les Muets)の主人公イヴァールのモデルとなった樽職人で、やはり言語障害があった。一家を支配していた祖母は『裏と表』で活写されている通りの威圧的でヒステリックな女性であり、彼女がアルベールをその母から切り離すのは、よりねばついた情念的なかわりを孫に強要するためでしかなかった。

これは見ての通りかなり傾向的な環境である。ここには子供を社会化するた

めの「父性機能」の二つの働き——母と子供を切り離す「父の否」(le Non du Père)と、子供に言語を習得させ、経験を記号化する仕方を教える「父の名」(le Nom du Père)——がともに欠落している。

父性機能が欠落した家庭環境で成熟しなけりばならなかつた少年の「男性」観は、当然つよいバイアスを受けたものとなるだろう。

「父の不在」はさまざまな徴候としてカミュの自己造型プロセスに干渉してくる。

第一に、彼は模倣すべき範例を持つことができなかった。

ジャン・グルニエはカミュの家庭環境の特性を「範例の欠除」という形で総括している。

「アルベール・カミュの父はアルザスの出身であり、母はスペイン出身である。彼らにとってはすべてが新しく、すべてがこれから作り上げられるべきものであつた。(…)彼らには守るべきものはなかつた。建設すること、打ち壊すこと、また建設すること、それがこの人たち——過去も、維持すべき伝統も、従うべき教訓も、仰ぐべき範例も持たず、ひたすら光のうちに生きることを喜ぶ人たち——の日々の仕事であつた。」<sup>9)</sup>

カミュには誇るべき家名も、父祖の勲功も、伝えるべき家風もなかつた。彼が知りえたのは彼の父祖たちは何らかの理由で故郷を喪失し、未知の荒野に運命を託した「根のない人々」(déraciné) だつたという事実だけである。父母両系について、彼は二代以上遡ることができなかった。(その大きな理由は入植者の多くがそうであつたように、カミュの父祖たちも家族の伝承を記録に残すだけの読み書きの能力を有さなかつたことによる。)

カミュがこの環境的与件から汲み出しうるものがあつたとすれば、それはこの「根を失っていること」——別の言い方をすれば、範例のない状態を範例として生きること——を肯定的に捉えることの他にはなかつた。

「父の不在」はカミュ一家に物質的窮乏をもたらした。カミュはこの状況を「赤貧」(dénuelement) という言葉で言い表わしている。それは単に経済的に困

窮し、身を包むものさえないというだけでなく、赤裸な、剥き出しの現実と直接的・無媒介的に対面しているという状況を指している。

カミュはこの状況の極限性からも肯定的な要素を汲み出す。

「私は貧困のうちに生きていたが、同時にある種の豊饒性のうちにも生きていた。私は自分のうちに無限の力を感じていた。」<sup>10)</sup>

「最大の贅沢とは私にとってある種の赤貧とつねに一致していた。」<sup>11)</sup>

赤貧が豊饒であるという逆説はそれほど複雑なものではない。

ふだん私たちは「物語」のうちに無反省的に棲みついている。私たちはアモルフな現実を恣意的に分節し、整序し、「有意的連関」を構成し、そのような「世界についての物語」の繭の中に棲まっている。逆に赤貧とは「剥き出しにされてあること」である。アモルフな現実が非分節でカオティックで、「無意味」なままに肉迫してくる状態である。

現実を分節し、整合的な「物語」として構成しようとする人間的努力に対しては「世界の意味」が代償として与えられる。しかし赤貧が経験するのは、いかなる人間的努力の報償でもない「世界の無意味」である。「物語」を破裂させるような世界の奥ゆきと宏大さである。

「豊かさのある段階においては空そのものも、満天の星も、自然の恵みのように思われる。けれど、梯子の一番下の段から見ると、空はそのすべての意味を回復する。対価なき恩寵だ。(une grâce sans prix.)」<sup>12)</sup>

「豊かさ」、それはおそらく「父」が「子供たち」に保証してくれるものだ。それは「名づけられたものは名を持つ」という一種の循環運動に支えられた安定性のことである。

「赤貧」とは「名づけえぬものは名を持たない」という単純で眼の眩むような不安定性のことである。

しかしこの一種の無量性の経験は、人間の紡ぐ「物語」の矮小さを教えるだけでなく、「宏大である」ことの要請としても働く。無量性の経験が、人間の側に「容量の拡大」を求めるからである。

「ぼくの生は拒絶するにせよ、受け容れるにせよ、切り分けることのできぬ一つの塊としてぼくの前にあった。ぼくにはある種の大きさが必要だった。(J'avais besoin d'une grandeur.)」<sup>13)</sup>

カミュの家庭環境における「父の不在」はこうして「範例を持たぬことの範例性」「世界の非分節性の経験」「宏大さへの志向」といったとりとめのない徴候においてカミュの思索の初期条件を構成した。「男性」としてのカミュの自己造型はこの条件に規制されながら構想されることになる。

### 3・

少年期のカミュの性差意識は「父の不在」と「母の現前」によって決定づけられた。

母はアルベール・カミュにとって、世界の宏大さと混沌性を端的に体現していたからである。

「彼女は不具で、うまくものが考えられない。」<sup>14)</sup>

彼女はほとんど言葉を発しない。「ときおり『何を考えているの』とたずねると『何も』と答える。本当にそうなのだ。すべてがあるから何もないのだ。(Tout est là, donc rien.) 彼女の生も、彼女の利害も、彼女の子供たちも、ただその場にいるだけだ。あまりにも自然にそこにあるので彼女には感知されないのだ。」<sup>15)</sup>

彼女は「差異づけ」(différencier)をしない。彼女と世界のかかわり方はそれゆえ「無差異＝無関心＝分け隔てのなさ」(indifférence)という形をとることになる。

彼女は差異づけと序列化を拒み、世界を分節する線から逃れ去る。

「彼女は子供たちを愛している。彼女は分け隔てのない愛情で(d'un égal amour)子供たちを愛しているが、その愛情は決して彼らにはあらわに示されなかった。」<sup>16)</sup>

「あの不思議な母の分け隔てのなさ！(L'indifférence de cette mère



étrange ! ) そこにあるのはただ世界のあの広漠たる単独性 (cette immense solitude) だけであり、それがぼくに世界の宏大さを教えてくれるのだ。」<sup>17)</sup>

母は無差別で無際限な「愛」の湧出する源泉であり、その愛は「あらわに示される」(se révéler) ことがない。母はブランショ的な「夜」の晦冥のうちに隠れており、「開示」や「暴露」というような視覚的・光学的操作によっては捕捉されることがない。

「母なるもの」についてのこのようなコノタシオンは特に独創的なものではない。老子の「玄牝」からクリステヴァの「コーラ」まで、秩序以前の「生成するカオスの場所」はしばしば「母」のメタファーで語られてきた。

しかしカミュの母性認識の特徴は、そこに無秩序、無量 (sans mesure) を見るだけでなく、「大きさ」の要請として、子供の成熟を方向づける力を認めることにある。

精神分析的知見による限り、差異化・秩序化を統御する父性機能に比して母が過剰なプレザンスを示すことは、子供の成熟の阻害要因となる。

しかるにカミュは「母の欲望」を「宏大さ」への要請として教化的に読み換えることによって、母性に主導された成熟というきわめて反西欧的、反近代的なモデルを造型してみせる。

母は父性の介入なしに、父が習得させる象徴や記号の助けを借りることなしに、その「広漠たる単独性」を以て、子供にある種の「明晰」をもたらす。母は、あたかも私生児を産み出すように、母性的「明晰」を産み出す。

「ぼくにはぼくの明晰が必要だ。そうなのだ。すべては単純だ。物事を複雑にするのは人間たちなのだ。(J'ai besoin de ma lucidité. Oui, tout est simple. Ce sont les hommes qui compliquent les choses.)」<sup>18)</sup>

「ぼくの明晰」は独特な明晰だ。それは「すべてが単純」であること、つまり世界の生成は単一の起源をもつことを「ぼく」に教えるからだ。

オイディプス神話の究極的メッセージがもしレヴィ＝ストロースの言うように「私たちはなぜただ一人の産出者 (un seul géniteur) ではなく、一人の母の

他にさらに一人の父を持つようになるのかを理解すること」<sup>19)</sup> にかかわっているとすれば、「ぼくの明晰」は反・オイディプス的な生成解釈だということになるだろう。

カミュによれば、生成の唯一の起源は母である。私たちは「ただ一人の産出者」しか持たないのだ。「男たち」(les hommes) はただ「物事を複雑にする」ために事後的に到来するにすぎない。

子供の成熟を促すのは母の単独性と無量性なのである。

「母は子供の言うことを聞かない。彼女は耳がきこえないからだ。(…) 母はいつでもそのように沈黙しているだろう。」<sup>20)</sup>

母は聞かず語らず、いかなる言語活動にも与しない。彼女はただ無言のうちに世界の深みを指示するばかりだ。子供はそこから成熟への推力を抽き出す。

「彼は苦悩のうちに成長するだろう。大人になること、それが大事なのだ。(Etre un homme, c'est ce qui compte.)」<sup>21)</sup>

「大人になること」「男になること」は父による去勢を経由することでも、言語活動を習得することでもなく、母の推力を得てある種の「明晰」と「大きさ」を獲得することである。

#### 4・

「男」は「父」ではない。

「男」とは「母」の主導の下で成熟した「子供」のことである。「男」の社会関係は二種類しかない。「男と母」の関係と「男と男」の関係である。「父」はどこにも占めるべき場所を持たない。

カミュはベルクールの「男」たちの肖像を次のような簡明な筆致で描き出している。

「ベルクールでは(…) 人々は若くして結婚する。人々は非常に早くから仕事に就き、10年間で人生の経験を汲み尽くしてしまう。30歳の労働者はすでに彼の手持ちのカードを使い切っている。彼は妻子の間で人生の終わりを

待つ。彼の幸福は唐突で、無慈悲だ。」<sup>22)</sup>

ベルクールの男たちにとって、成熟とは確実に階梯を昇ったり、何かを積み上げてゆくような建設的な営みではなく、むしろカタバルトから勢いよく打ち出された少年が初速を失って失墜する救いのない経験に類比される。

彼らに栄光があるとすれば、それは人生を法外な安値で売り払ってしまう蕩尽の豪奢のうちにある。彼らにとって「人生は構築するものではなく燃尽するものなのだ。」<sup>23)</sup>

けれどもその蕩尽是決して無原則的なものではない。

「この男たちは彼らなりの原則に従っている。彼らには彼らに固有のモラルがある。男は母に背いてはならない。表では妻の体面を保たねばならない。妊婦に思いやりを示さなくてはならない。一人の相手に二人でかかっていてはならない。それは『卑劣なことだ』(Ça fait vilain) だからだ。以上の基本的戒律を守らない者は『男ではない』(il n'est pas un homme) とされる。それでけりがつく。」<sup>24)</sup>

この「男」たちのモラルは驚くほど率直に反・父性的である。

彼らは「母」たちに仕えるために努力の過半を割く。そして残りは「決闘」に注がれる。

なぜ「決闘」なのだろう。

ベルクールのモラルに従えば「男と男」の関係は「一対一」(d'homme à homme) でなければならない。男と男のかかわりに干渉するもの(「一人の相手に二人でかかるもの」)は「卑劣漢」(vilain) とされて、男たちの世界からは排除される。

男と男の「決闘的＝双数的(duel)」な関係に干渉する「第三者」は、ストリート・ファイトにおける加勢であれ、司直の裁定であれひとしく「卑劣」である。

「一人の男が警官に引き立てられてゆくのをみるとぼくの周りの人たちは一様に同情を示した。そしてその男が盗人か、親殺しか、あるいは単なる反骨漢か分からないときはいつもこう言った。『気の毒な奴だ。』そしていささかの称

賛のニュアンスをこめてこう続けた。『あれは海賊だ。』<sup>25)</sup>

犯罪者への共感とは「第三者」としての警察・司法権力への根深い拒絶と結びついている。

ラカンの言うように、双数的（＝決闘的）関係を断ち切り、三項関係を構築するために介入してくるものが「父であり、法であり、言語である」とするならば、ベルクールの男たちがひたすら排除しようとしているものが何であるのかはおのずと明らかだ。（じじつかミュはベルクールにおいて最もありふれた犯罪として「窃盗」の次に「親殺し」（parricide）を挙げている。「母に背いてはならぬ」をモラルとする男たちが殺す親とは誰のことなのだろう。）

『異邦人』に登場する男たち（ムルソー、セレスト、レイモン、マソン）は典型的な「ベルクールの男たち」である。ムルソーの殺人は「決闘」のルールを厳密に自分に適用した結果であり、そのルールに照らす限り、この殺人事件にはどのような「不条理」性もない。

ムルソーの発砲は彼自身がその直前にレイモンに告知したルールの必然的帰結である。

「男同士でやれ。（Prends-le d'homme à homme.）君の銃をばくによこせ。もし他の奴が出てきたり、あいつがナイフを抜いたら、ばくが奴を撃ち殺す。（Je le descendrai.）」<sup>26)</sup>

「男対男」の決闘に加勢に入ったり、武器を使ったりする者は「卑劣漢」であり「男ではない」から、「撃ち殺して」「けりがつく」（l'affaire est réglée.）のは当然のことなのだ。

これは「男たち」の常識に属する。だからこそ裁判で友人たちは逡巡することなくムルソーのために証言する。レイモンは「彼は潔白だ」と証言し、セレストは「彼は男だ」と証言し、マソンは「彼は誠実な男、勇敢な男だ」と証言する。

彼らは一様にムルソーが「男である」ことが事件の必然性と悲劇性を言い尽くしており、それが同時に免責事由たりうると信じている。

問題はまさに彼らが切り札のように口にする「男である」ことが法的言語の支配する場では何の意味も持たないことなのだ。

## 5・

『異邦人』の主人公ムルソーはそのような意味においてカミュ的「男性」の究極の姿である。ムルソーは最後まで双数関係に固執し、第三者の介入を峻拒する。

冒頭の一節がこの物語の基調をなす経験を何のてらいもなく提示しているだろう。

「今日、母が死んだ。(Aujourd'hui, maman est morte.)」

「母が死んだ」のだ。背いてはならぬもの、格別の敬意を払うべきもの、そして「男」の唯一単独の産出者が消滅したのだ。つまりこの小説はムルソーにとっての世界の瓦壊から開始される。主人公は物語の冒頭ですでに半ば以上死んでいる。彼の刑死はすでに始まっていた死を成就するものにすぎない。

「今日、母が死んだ。昨日かもしれない。ぼくには分からない。養老院から電報を受け取った。『御母堂逝去。埋葬明日。敬具。』このことには何の意味もない。(Cela ne veut rien dire.)」<sup>27)</sup>

「このこと」(cela)とは電報の文面を指すのではない。「このこと」とは「母の死」という出来事そのものを指している。

「母の死」はいかなる言語表現によっても汲み尽くしえない絶対的に非分節的な出来事として主人公を圧倒している。だから彼はこの出来事の起きたのが「今日か昨日か分からない。」日付には何の意味もない。そのような数量的分節に「母」は本質的に無縁だからだ。(ムルソーは母の年齢さえ知らない。)

この出来事はどのような隠喩や象徴を以てしても代理表象しえないし、またすべきでもないムルソーは感じる。彼はこの巨大な喪失感をそのまま剥き出しの形で維持しようとする。

彼はそれゆえ母の死について語ること、それを主題化することを自らに禁

じ、服喪にふさわしい社会的演技を拒否する。それは母の死という絶対に名づけえぬ喪失の経験、無量性の経験を詐術的に象徴化し、馴致し、日常的・公共的に理解可能な事件にすり換えてしまうことだからだ。

母の死には涙してはならない。

「誰にも、誰にも彼女の死を悼んで涙する権利はない。」<sup>28)</sup>

「死を悼んで涙する」ことによって「母の死」は「意味」を持ってしまうからだ。

「母の死」はその純粋な「無意味さ」において保持されねばならない。

「埋葬されたあとには(…)母の死も類別された事件 (une affaire classée) となり、すべてはより公的な外観 (une allure plus officielle) を帯びることだろう。」<sup>29)</sup>

「類別された事件」となり「公的な外観」を帯びるとき、母の死は「父の言語」の力域へ回収されてしまう。「男」は母の死をその双数的純粋性において、剥き出しの実相において保持しなくてはならない。

『異邦人』は母の死を有意義的な言語では語るまいとする「男」と、それを類別可能な公的事件として語り切ろうとする「父」の確執をドラマの緯糸として進行する。

法の言語を語り、ムルソーの斬首(去勢)を求刑する検事は全身を父の隠喩で飾り立てている。彼は殺人事件とは直接何の関係もないはずの「母の死」に徹底的に拘泥する。それというのも彼は母の死について語るまいとするムルソーの意志のうちに父への最も危険な反逆を見抜くからである。

母の死に涙しないとは母の死を父の言語では語らないことであり、父の言語の全能性・汎通性に異議を申し立てることである。

「母を精神的に殺すものは、父を手にかけてたものと同じ罪科で社会から排除されてきた」<sup>30)</sup>と検事は語る。彼は正しくムルソーの罪を言い当てている。それは翌日同じ法廷で審理される被告と同じく「父殺し」(le meurtre d'un père)の罪なのだ。

「この腰掛に坐っている男は明日この法廷が裁くことになっている殺人事件についてもまた有罪なのです」と検事は言い切る。「この男はその事由によって罰されねばならないのです。」<sup>31)</sup>

検事は完全に正しい。「父の名」を拒み、母の「象徴的殺害」(原抑圧)に同意せず、父の言語を以てしては語りえない広漠たる「意味しないもの」を抱きしめたまま社会にとどまろうとする者は殺されねばならない。まさしく「この男に見出されるような心の空洞 (le vide du cœur) が、社会をも呑み込みかねない一つの深淵 (un gouffre) となるようなときには」<sup>32)</sup> なおさら殺されねばならないのだ。

刑が確定したあと、次はムルソー自身の死を「類別された事件」にするために司祭がやって来る。社会に穿たれた「深淵」への開口部は縫合されねばならない。彼らの戦いは熾烈だ。

ムルソーは彼自身の死をもまた母の死と同じく、いかなる象徴化・記号化をも拒む「意味しないもの」として保持しようと望む。司祭は死に「意味」を与えようとする。

『あなたはそれでは何の希望も持たず、自分が完全に死ぬだろう (mourir tout entier) と考えて生きているのですか』と彼はたずねた。『そうです』とぼくは答えた。<sup>33)</sup>

神も来世も信じないと断言するムルソーにさらに司祭が食い下がるとき両者の対決の構図は明瞭な形をとる。

「彼はなぜぼくが彼を『ムッシュ』と呼んで『神父様 (わが父)』 (mon père) と呼ばないのかとたずねた。この言葉がぼくの怒りに火をつけた。(Cela m'a énervé.) ぼくは彼に向かってあんたなんかぼくの父じゃないと答えた。ぼくの父は他の人たちのところにいる。」<sup>34)</sup>

クールなムルソーが篇中唯一怒りをあらわにするのは「わが父」の現前の承認を求められたときである。「父」はムルソーの「癪にさわる」(énervé) のだ。

ムルソーは激昂して司祭の首を締め上げ、看守に制止される。司祭は「眼に

涙を一杯にたたえて」姿を消す。

司祭はマルソーの死に「涙を流して」みせる。彼の死の「意味」を司祭は一人で作り上げ、それを持ち帰る。

残されたマルソーは「激しい怒りによって不快な思いから浄化され」「世界のやさしい分け隔てのなさ（*tendre indifférence du monde*）に向けてはじめて身を委ねる。」<sup>35)</sup>

検事や司祭（「父たち」）と戦って「意味しないもの」を護持したことによってマルソーは小説の冒頭で喪失した「母」の「やさしい分け隔てのなさ」を回復する。

残された仕事は、刑場で「憎しみの叫びに迎えられ」、決して「意味」を持つことのない死、「完全な死」を成就することだけである。

## 6・

『異邦人』は私たちの解釈によれば「母の死」の根源的な表象不可能性を守ろうとする「男」と、すべてを表象しようとする「父」との間の闘争のドラマである。

この作品に私たちはカミュの性差認識の特質を認めることができる。それは男と女の性差は二次的なものにすぎず、真の「種差」は「男」と「父」の間にあるとする考え方である。

「父」とはときに国家権力であり、ときに神であり、ときに全体知（ヘーゲル＝マルクス主義）である。それらがいずれも双数的＝決闘的關係に第三項を介入させようとするものである限り、「一人の相手に二人でかかる」卑劣漢の場合と同じく「撃ち殺す」べきなのだ。だからカミュの思想的な戦いはつねに「父」を標的にすすめられることになる。

「母」は「男」の戦いの正統性の淵源である。しかし「母」は友人でも同盟者でもない。なぜなら「母」と「男」の關係は「父」の場合とは違った意味で非対称的だからだ。



「母」は「背いてはならぬもの」として「男」の上位にあり、「格別の思いやりを示すべきもの」として「男」の庇護下にある。崇敬されるにせよ保護されるにせよ、あるいは同時に崇敬されつつ保護されるにせよ、「母」は「男」とは決して等格になることがない。ポーヴォワールはカミュのかかる性差認識の構造を理解することができなかった。しかしたとえ「封建的」と揶揄されようとも、これはカミュの思考の本質にかかわることだったのである。

1952年のサルトル＝カミュ論争でカミュが決定的な傷を負ったことはかくれもない事実である。そのときにカミュを最も深く傷つけた言葉は（おそらくサルトル自身もその致命的効果を予測していなかった）次の言葉であろうと思われる。

「君はかつては貧しかった。しかし今はそうではない。君はジャンソンやぼくと同じようにブルジョワだ。(…)貧しき者たちの兄弟であると自称したければその人生のすべての瞬間を彼らのために献げる覚悟が必要だ。とすれば君は彼らの兄弟ではない。(…)彼らの兄弟？いや違う。君は『この人たちは私の兄弟です』と言う弁護士なのだ。というのもその台詞は陪審員を泣かせる決めの文句だからだ。分かってくれるだろうが、ぼくは訳知り顔の家父長的な演説 (discours paternalistes) にはうんざりなのだ。」<sup>36)</sup>

サルトルは直観的にカミュが最も厭がる比喩を探り当てた。それは「法的言語を操るもの」にカミュをなぞらえることだ。サルトルは「陪審」を泣かせる「弁護士」の役をカミュに振った。抑圧された兄弟の名において、誰一人反論できない正義の論を述べ立てる「暴力的で勿体ぶった独裁者」、それは『異邦人』でまさに正義の名においてムルソーに死刑を求刑する検事の姿と重なり合う。

カミュは彼自身が全力を尽くして戦ってきた当の敵手と同じ罪状で告発される。カミュはその過剰な「父性」によってサルトルに弾劾されたのだ。

この告発はおそらく全く予想外のものだったに違いない。「歴史」の名においてサルトルがカミュの「反動性」を批判した点について、カミュは十分な反論の備えがあったはずである。しかしまさか「家父長」的な「全能性」を痛撃さ

れるとは思ってもいなかっただろう。

気づかぬうちに「男」は「父の言語」を語り始めていた。これはカミュの思想的営為の全行程が徒労であったことを意味している。

この救いなし虚脱感をカミュは『転落』において重い口で語ることになるだろう。しかしこのテキストの奥ゆきを分析するだけの紙数はもう残されていない。

私たちはいずれにせよ「父」と「男」の非妥協的な対決という構図がカミュのテキストの深層につねにわだかまっていることを指摘するところで筆をとどめねばならない。(了)

註

- 1) Simone de Beauvoir, *La force des choses I*, Gallimard, 1963, p. 79.
- 2) Ibid., p. 355.
- 3) Jean-Paul Sartre, *Simone de Beauvoir interroge J.-P. Sartre*, in *Situation X*, 1976, pp. 141-142.
- 4) Beauvoir, *op. cit.*, p. 101.
- 5) Sartre, *op. cit.*, p. 131.
- 6) Ibid., p. 118.
- 7) Ibid., p. 129.
- 8) 拙論「鏡像破壊——『カリギュラ』のラカンの読解」『神戸女学院大学論集』第39巻第2号（通巻第114号）1992年。
- 9) Jean Grenier, *Albert Camus, Souvenirs*, Gallimard, 1968, p. 182.
- 10) Albert Camus, *L'envers et l'endroit*, in *Essais*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1965, p. 14.
- 11) Ibid., pp. 17-18.
- 12) Ibid., p. 24.
- 13) Ibid., p. 39.
- 14) Ibid., p. 25.
- 15) Id.
- 16) Id.
- 17) Ibid., p. 26.

- 18) Ibid., p. 30.
- 19) Claude Lévi-Strauss, *La structure des mythes* in *Anthropologie structurale*, Plon, 1958, p. 240.
- 20) Camus, *op. cit.*, p. 26.
- 21) Id.
- 22) Camus, *Noces*, in *Essais*, p. 72.
- 23) Id.
- 24) Id.
- 25) Id.
- 26) Camus, *L'Etranger*, in *Théâtre, Récits, Nouvelles*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1962, p. 1166.
- 27) Ibid., p. 1127.
- 28) Ibid., p. 1211.
- 29) Ibid., p. 1127.
- 30) Ibid., p. 1197.
- 31) Ibid., pp. 1197–98.
- 32) Ibid., p. 1197.
- 33) Ibid., p. 1208.
- 34) Ibid., p. 1210.
- 35) Ibid., p. 1211.
- 36) Sartre, *Réponse à Albert Camus*, in *Les Temps Modernes*, août, 1952, p. 336.

## Summary

# La Mère comme “Non-signifiant” — Albert Camus et la Sexualité

Tatsuru Uchida

Dans ses mémoires, Simone de Beauvoir a osé employer un adjectif: “féodal” pour qualifier le caractère trop viril d’Albert Camus. Son observation ne manque pas de clairvoyance. Comparé avec la position “féministe” de J.-P. Sartre, le culte de l’homme qu’on trouve chez Camus paraît un peu démodé. Mais le problème n’est pas si simple qu’on ne le croie.

D’après le “machisme” de Camus, “être un homme” n’est pas un fait biologique. Le fait simple d’être né mâle n’en constitue pas la condition suffisante. A Belcourt où il se formait, on lui enseignait qu’il fallait des efforts inlassables pour être un homme. Celui qui les négligeait ne serait pas considéré comme un homme, mais un “vilain”.

Camus savait bien que la masculinité est un fait social, et qu’il n’y a pas de nature masculine. Cependant, il n’a pas cessé d’y miser son enjeu. D’où vient cet attachement absurde?

Nous voudrions analyser l’origine de son machisme à partir d’une donnée particulière de sa situation familiale: absence totale du père, au sens psychanalytique du terme.

Camus devait se former sans le “père” qui le dirige vers la maturité. La pression qui l’y poussait, il l’a reçue de la “mère”.

Nous croyons que la maturité sous la direction exclusivement maternelle est la clef qui nous permettra de comprendre son machisme, et

en même temps, d'interpréter quelques pages énigmatiques de son roman:  
"l'Etranger".